

アフリカの稲作 < 第 6 回 >

最終回：本シリーズのまとめと今後の課題

アフリカの稲作と題してこれまで、5 回にわたって連載してきた。第 1 回では、最近のアフリカに対する稲作支援の流れを説明し、国際耕種が取り組んできたアフリカの稲作にかかわる活動を概観した。シリーズの第 2 回以降では、タンザニアにおける全国灌漑開発計画策定の事例、ウガンダの陸稲栽培の事例、ギニアの稲作の現状、本邦で実施する地域別研修、アフリカ地域陸稲品種選定技術コースの活動について紹介してきた。

アフリカの稲作システムの分類は国や地域によって独自の分類法がある場合もあるが、第 4 回で紹介した地理的条件による分類、すなわち、「丘陵地・傾斜地」、「内陸小低地」、「河川沿いの氾濫原」および「海岸低地」の 4 つは、概ねアフリカの他の地域にも当てはめられると考えられるため、今回は、これを用いてシリーズの各回で紹介された事例を下図に整理した。

第 1 回では、CARD がアフリカの稲作栽培システムを「灌漑水田」、「天水低湿地」、「天水畑地」の 3 つに分類して、それぞれのシステムに適した、品種の選定、栽培技術の改善、必要な投入の促進を行い、増収を図ろうとしていることを紹介した。ギニアの地理的条件の分類をこの栽培システムに当てはめると「内陸小低地」、「河川沿いの氾濫原」、「海岸低地」は、灌漑施設の有無から、「灌漑水田」と「天水低地」に分類される。また、「丘陵地・傾斜地」は「天水畑地」となる。

第 2 回で紹介したタンザニアでは、年間降雨量が 500 から 1000mm 程度であり、内陸低地や河川沿いの氾濫原で水稲作をする場合でも基本的に灌漑が不可欠であるため、国全体の灌漑マスタープラン調査をした事例であった。灌漑施設に必要な資金力、技術力、組織力が、充分には整わない環境で、小規模灌漑整備に重点を絞ったマニュアルを作成し、農民参加に基づく県レベル主導の開発推進体制のガイドライン整備を進めた。

第 3 回で紹介したウガンダの陸稲作は、「丘陵地・傾斜地」よりもむしろ土壌水分や肥沃度が高いと考えられる「内陸小低

地」において陸稲をより安定的に栽培しようとする農家の実践であった。

第 4 回のギニアの事例では、「内陸小低地」や「河川沿いの氾濫原」で粗放的な水稲作が行われていることを報告した。ギニアの開発計画調査では、これらの環境に適した低投入型灌漑施設の整備と環境に適応した作付け類型化の中での稲作栽培を目指しているが、ギニアはタンザニアと異なり、降水量が非常に多く、洪水による被害が大きいことが特徴的であり、この点が灌漑施設の導入や、栽培技術の開発においても考慮されなければならない。

これらの事例でわかるように、地形的要素が同じでも降雨の量や分布により、稲作の環境は変化する。それぞれの環境に適正な技術を見極めること、また水稲作、陸稲作それぞれに適正な栽培環境を見極めることが重要である。

水稲、陸稲ともに稲は他の作物に比べ水を多く必要とする作物である。安定的に生産性を高めるためには、限られた水資源を有効利用する知恵が必要であり、これまでも国際耕種が取り組んできた水の有効利用法の考え方が重要になると考えている。また、アフリカにおける米の地位はアジアとは異なるため、環境に適した多様な作物を含む循環型の営農の中での稲作を目指すべきであり、それを実現するためには、多様な地理的条件の有効利用、作物の多様化、作期の多様化などの視点をもった技術開発が必要になる。さらに、国際耕種がアフリカの稲作にかかわっていくに当たっては、第 5 回で紹介した「陸稲品種選定技術コース」の 16 カ国 50 人の帰国研修員とのつながりも活しながら取り組んでいきたい。

